

無意識と意識，そして，インプリシット心的特徴

山 崎 勝 之^{*}，内 田 香奈子^{*}，横 嶋 敬 行^{**}，
内 山 有 美^{***}

(キーワード：無意識，前意識，意識，インプリシット心的特徴，セルフ・エスティーム，アフェクト)

無意識の重要性

近年，無意識の機能の重要性が取りざたされている。精神分析学を構築した Sigmund Freud 以来の脚光を浴びていると言える。Freud の理論や手法は科学的な根拠（エビデンス，evidence）はなく，仮説で終わっていたことは事実である。それに対して近年の無意識にかかわる研究は，実証科学のもと，誰もが再現できる手続きを用いてエビデンスを示しながらの知見構築となっている。

Bargh & Chartrand (1999) はレビュー論文の中で，我々の日々の活動の9割以上が無意識によって決定されていることを示唆した。無意識によって決定されていると言われても，それを意識することはできない以上実感はないが，確かに，列挙すれば無数にある我々の日々の活動（生活上の営み）のほとんどが無意識的に行われていることは想像に難くない。

この無意識の機能は，脳科学，社会心理学，認知心理学，臨床心理学等に関心を集める研究テーマとなり，この傾向と同時に，一般向けの書籍も海外で多数冊発刊され，顕著な遅れなくその大半は翻訳され日本でも出版されている¹⁾。とは言え，そこでの研究成果はいまだ一般にはほとんど知られておらず，無意識の機能の新知見とは無縁のまま人々の生活は営まれている。その知見の多くは，私たちの営みについての既成観念を根底から覆すほどの斬新さがあり，知らないでは済まされないほどの重要知見でもある。とりわけ，以下の例示は常識に反するほどのインパクトをもち，見逃せない。

まずは Libet, Gleason, Wright, & Pearl (1983) の研究が挙がるが，この研究ほど意識上の活動の守備範囲を狭めた研究は他にはない。彼らの実験では，大学生が実験室の椅子に座り，目の前に時計盤（2.56秒で光点が一周する）があり，好きなときに手首（または指）を曲げ，曲げようと考えた光点の位置を報告する，という課題を行った。実験中は脳波と筋活動を測定し，手首を曲げる運動の準備電位と腕の筋電位により運動の開始を同定した。その結果，曲げようという意志が意識される約 400 ms 前に準備電位が発生していることが分かった。つまり，何かをしようと（意識的な）意志によって開始する前に，その行動を引き起こす無意識的な脳の活動が始まっていたことになる。その後，この実験結果が正しいことは追試されている(e.g., Haggard & Eimer, 1999; Keller & Heckhausen, 1990)。Libet らの研究は，人の自由意志の存在を根本的に問い直す知見をもたらし，多くの論争を引き起こすことになった。

さらに Libet, Wright, Feinstein, & Pearl (1979) は，意識の働きについても興味深い知見を報告している。Libet (2004) は，脳内の皮質の直接刺激を駆使した 1979 年の実験知見をわかりやすく次のように説明している。今，市街道路を時速30マイルで車を運転しているとす。そこへ突然，ボールを追いかけてきた少年が車の前に飛び出てきた。急ブレーキを踏み，車は急停止する。少年の出現を見てブレーキを踏むのは意識が介在することなく実行される。そして，少年への実際の気づき（アウェアネス，awareness）は少年が出現した後 500 ms の時点で生起するが，驚くべきことに，実際の出来事から遅延したはずのアウェアネスは，主観的に前に戻り，つまり時間的に逆行し，ずれなく出現時すぐに少年を見たと報告する。これは，意識が我々を騙すにも似た現象で，意識の不確かさとともにその機能について興味をそそる知見を提供している。

^{*}鳴門教育大学大学院人間形成コース

^{**}鳴門教育大学予防教育科学センター

^{***}四国大学全学共通教育センター

今1つの例は、de Gelder et al. (2008)の研究である。そこでは、二度の脳卒中に見舞われ、機能ならびに解剖学的脳イメージング検査により、視覚皮質の機能が失われ、盲目と診断された男性が紹介されている。その男性が、杖を置き、障害物が散りばめられた初めての廊下を、一人で障害物にぶつかることなく渡り切った。そのときの光景はビデオクリップでも公開されている (www.beatricedegelder.com/books.html)。男性は、どのようにして渡ったのかを答えることができない。正に、意識が関与できないところでの‘見え’があるということを示している。

この実験については、Ungerleider & Mishkin (1982)により提起された2つの視覚経路から、男性のこのような行動が可能であることが示唆される。2つの視覚経路とは、網膜からの信号が外側膝状体から一次視覚野に至り、その後、皮質内の2つの異なる経路に沿って信号が伝わることを指す。1つは腹側視覚経路で、大脳半球の両側の基底部にあたる下部側頭皮質に至る。今1つは背側視覚経路で、大脳半球の頭頂部にあたる後部頭頂皮質に至る。前者が「知覚のための視覚」、後者が「行為のための知覚」に対応している可能性がある (Goodale & Milner, 2004)。腹側経路が意識を伴う経路で、背側経路が意識を伴わない経路と簡単には区別できないが、少なくとも背側経路の活動は意識されることはない (Goodale & Milner, 2004)。しかも、背側経路は、網膜から上丘そして視床枕を通して入力も受けており、この入力過程には一次視覚皮質は関与していない (Ungerleider & Mishkin, 1982)。このことは、一次視覚皮質が損傷を受けていても背側経路が動作する可能性を示唆し、行為を導く知覚が存続する可能性を示唆している (Goodale & Milner, 2004)。

近年は、神経精神分析学 (neuropsychanalysis) という学問のもと国際神経精神分析学会が2000年に設立され、専門の学術誌 (Neuropsychanalysis: An Interdisciplinary Journal for Psychoanalysis and the Neurosciences) も発刊されている。Freudの無意識をベースにした理論に神経科学のメスが入れられ、Freudの見解を科学的に究明し、また修正・発展させる動きが顕著に認められる。こうして、脳科学、精神医学、心理学等多分野で無意識の機能が脚光を浴びている現況が生まれている。

意識とは何か

無意識の機能についての研究が盛んになると、同時に意識についても興味が注がれるようになってきた。ここでは、意識とは何で、どのように発生し、どのような機能をもつのか等の疑問が投げかけられている。意識は人にとって身近な存在で、当たり前のように存在しているにもかかわらず、このような疑問への明確な回答がないことには驚かされる。上記に、無意識について、学術論文のみならず多数の書籍が刊行されていることを示したが、意識についても同様に、多数の学術論文に加えて書籍が刊行され、その多くが翻訳され日本でも出版されている。無意識と比べて一般に与えるインパクトの低さからか、出版されている書籍は専門性の高いものが多い²⁾。

意識の研究には実際に多くの研究者が参入し、Francis Crickなどは、DNAの二重螺旋構造を発見したことでノーベル生理学・医学賞を受けたが、その後に意識の研究（特に視覚意識）に取り組んだことからこの研究領域の魅力と重要度がわかる。しかしながら、意識の問題は相当な難問で、上記の疑問への答えの糸口すら見えていない。多くの研究者により仮説的な回答が用意されているものの、その回答は研究者によってかなり異なっているのが現況である。Blackmore (2005 a) は、意識の研究にかかわる20名ほどの著名な研究者に意識の問題についてインタビューした書籍を著している。彼女自身は、諸家の見解に啓発されながらも、書籍の序文最末尾に、このインタビューを終えて「たしかに意識についてのさまざまな理論は前よりかなり理解できましたが、意識そのものについては—そんなものがあるとしても—残念ながらちっとも理解できていないようです」(山形・守岡訳, p. 22) と本音をもらしているが、これが現状であろう。

つまり、意識については判明していることはほとんどなく、意識など存在しないという見解をもつ研究者もいるほどである (Blackmore, 2005 b)。この点は、無意識が意識がない、気づかないという観点で現象を追うことで知見を重ねていることとは対照的である。上述の Libet et al. (1979) を引用して指摘したことの他、自己防衛性などの要因によりなにかと意識は虚偽的な報告をすることも意識の研究の発展を妨げていると言えよう。

ただし、意識と無意識に関連して研究を進める場合、意識とは何か、どのような機能があるのかについて、ある程度研究者の立場や見解を明らかにしておく必要があると思われる。本論文では、山崎・内田・村上 (2014) に従い、以下のように意識をとらえる。

意識は、まず、意識となり得る行動等が生起した時点で生じるというよりも、起こってからそれほど時間を置かないときに顧みて、そのときの行動や考えや認知などの営みが想起されるとき、それらは意識の領域にあった

と考えられる。そして、想起されていることが意識となる。この場合、それほど時間を置かないとはどれほどの時間のことなのかは、個人差（知能、年齢などを含めて）があり正確には言及できない。この想起までの時間が長いと、忘却が起こり、意識の領域にあったことかどうかは定かでなくなる。こうした側面を加味して考えると、意識領域と非意識領域の境界は曖昧で流動的であると考えられる。

こうして、意識はきわめて限定された範囲にスポットを当てることになり、またそのスポットは移ろいやすいことも指摘される。そして、スポットを当てることのできる領域は意識領域と考えられる。

そして、この想起による意識化とは別に、現時点の経験が直接意識になると判断できるときがある。それは、内観による。自らの営みに注意を向けてみて、自分の思考や行動をそれらの生起とほぼ同時に（あるいは若干遅れて）確認できる場合は、リアルタイムでの意識状態と考えることができる。この場合あるいは過去の行動の想起時には、意識している自分を意識することも可能になり、それは、意識状態をより明確にとらえることができるようになる。

こう考えると、意識の役割が見えてくる。意識の領域にある本人の過去の営みや活動を意識化することにより、また、ほぼリアルタイムでその時々々の営みや活動を内観をすることにより、そのときの活動に注目し、分析し、改善案を出し、あるいは今後の活動のプランに利用するなど、脳の高次な部分で理解と分析と方向づけを行うことができる。こうした機能は生存にとって適応的であるため、意識は進化の過程で残り、発展してきたものと思われる。人類の急速な進化を支えてきた機能と言え、当然のことながら、他の動物ではこの機能が劣る。すなわち、意識の存在とその機能は人間ほど明確ではないものと推測される。

無意識から意識までの構造におけるインプリシットとエクスプリシット心的特徴の位置付け

上記の見解から、人格構造として意識から無意識までの構造モデルを示したのが図1である。ここで、精神分析学での前意識（preconsciousness）をどう扱うかについてふれる必要がある。前意識には、抑圧されている経験ではなく、容易に想起できる経験が蓄えられていると考えられている。上記の説明からすると、これは意識（可能）領域と言える。厳密に言えば、この意識領域も無意識に近いところから意識に近いところまで多様な状態が想定され、無意識に近いところほど意識化することは困難になる。恐らく、前意識の概念は、意識可能領域でも無意識側に近い深みを指していると考えられる。また、抑圧と忘却の機能は異なるが、実際には、意識化できない場合、抑圧なのか忘却なのかの区別はつかない。忘却であっても、想起努力や偶然により想起され意識化されることがある。

意識領域（前意識）は通常は意識になく、これが意識化された場合と意識領域に留まっている場合とは、その内容がもつ影響力や意味は異なる。意識領域にある内容は一旦意識化されると防衛性などさまざまな意識的コントロールを受けることになるので、その内容が忠実に表現されることは難しい。

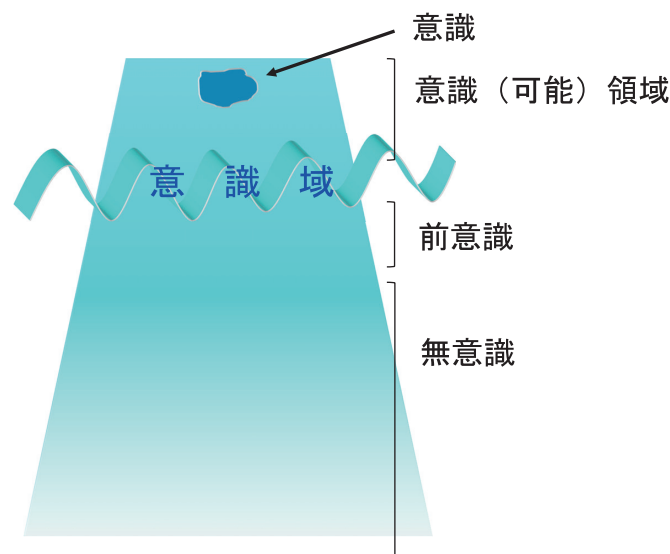


図1 意識から無意識までの人格構造

近年、感情や態度などの心的特徴をインプリシット (implicit, 潜在的) とエキスプリシット (explicit, 顕在的) に弁別してとらえることが一般に行われるようになってきた。とりわけインプリシット特徴は、最近その概念の構築と測定が盛んに行われるようになり、様々な態度 (e.g., Lane, Mitchell, & Banaji, 2005), セルフ・エスティーム (e.g., Bosson, Brown, Zeigler-Hill, & Swann, 2003), 感情 (e.g., Quirin, Kazén, Rohrmann, & Kuhl, 2009), 人生満足感 (e.g., Jang & Kim, 2011) など多様な領域でその適用が確認される。

エキスプリシット心的特徴は、自記式の質問紙で問われた項目に関して自分自身について答える場合等で測定されるもので、本人が意識上で気づいている当該の心的特徴への自己評価となる。この場合、問われている心的特徴が特性なのか状態なのかによって測定方法が異なる。特性の場合は普段の自分について問われるが、各質問項目について自分自身がどれほどあてはまるかを問われたとき、その項目内容について長期記憶から情報を入手し、意識化することにより (ワーキングメモリに入れることにほぼ匹敵) 普段の自分についての回答を決定し、その決定を紙上に表出する。状態の場合も同様であるが、‘現時点’や‘最近’など現時点を含む短期間の過去時間における自分について問われることになる。いずれにしても、このような質問紙上での測定では、防衛性など他の多くの要因に容易に影響された上での回答となることは繰り返し指摘した。

これに対して、インプリシット心的特徴はその定義が混沌としている側面がある。つまり、研究者によって、‘インプリシット’の用語の定義が異なったり、同じでも異なった側面が強調されて、‘インプリシット’の概念についての共通認識や扱いは十分ではない現状にある。そこで、本論文でインプリシット心的特徴について言及する場合、その定義や基本的な特徴を明らかにしておく必要がある。そのため、まず、研究分野によって異なる感情に関連した用語を整理しながら、インプリシット心的特徴を規定することから始める。上述のように、‘インプリシット’の用語と概念は多様な心的特徴に適用されているが、下に紹介する感情関連の心的特徴の機能は、インプリシット心的特徴の内容や働きにおいて中心的な役割を果たすと考えられることから重要になる。

まず、Damasio (1994, 2003) によれば、情動 (emotion) は生起時には意識されない身体的反応で、その情動が単独またはまとまって強く喚起されたときは意識領域に上り、特定の名称 (怒り、喜びなど) で指示可能な意識化できる感情 (feeling) になると考えられる。これに対して心理学では、Damasio の言う感情が情動になり、これに加えてアフェクト (affect) という用語を使用する場合が多い。アフェクトは、2次元モデルによると (e.g., Watson, Wiese, Vaidya, & Tellegen, 1999), 賦活 (activation) 次元 (活性-不活性) とヴェイレンス (valence) 次元 (快-不快) の2次元平面上でその変化を規定でき、無意識から前意識、そして意識可能領域に広く位置する感情関連特徴であると考えられる。本論文では原則として、今後情動と感情は Damasio の用語にそって使い分け、それにアフェクトを加えた用語を使用することになる。そして、それらの用語を総称する場合、‘感情関連特徴’という用語を使用する。

無意識が人格構造の底部に広く展開し、その底部が上部に影響を及ぼすことを想定すると、無意識の影響を受けない心的特徴はない。ただ、どこまで、どれほど、無意識によって影響されているのかを見極めることは困難で、また無意識の内容を測定することも、投影法のように測定と評価に時間と労力がかかり、また測定の実施や評価には客観性が欠如している。

このような用語の規定のもと、‘インプリシット’の用語の意味することを規定して行きたい。感情は情動から生まれることから無意識の影響を受けることは当然である。この点では、また情動は無意識から意識まで広く展開し、例えばインプリシット感情 (関連特徴) はこの情動のどこかの位置に存在すると想定される。Quirin et al. (2009) によると、インプリシット感情は、感情的経験の認知的表象の自動的賦活であると定義されている。感情の前概念的表象とも呼べ、基本的には前意識において機能していると想定されている。情動が概念化される前の表象とも言え、この点では、感情よりも情動に近く、さらに言えば、情動よりもアフェクトに近い。この点から Quirin らは、インプリシット感情や情動ではなく、インプリシット・アフェクトという言葉を使用している。前意識にあるということから普段は意識化されず、この普段の意識化されない状態で測定することがインプリシット特徴をとらえるために必須になり、意識化された時点でそれはインプリシット特徴ではなくなる。

こうしてインプリシット特徴は、意識化される前の本来の状態をそのまま測定して初めて「インプリシット」であると言える。このインプリシット特徴に関連した機能や概念は他にもあり、たとえば、情報処理に関連した2過程モデルがその例として挙げられる (Strack & Deutsch, 2004)。その2過程とは、連合的 (衝動的) ならびに内省的情報処理過程システムに対応し、前者は、表象が自動的に拡散する活性化に、後者は概念化と分類に基づいて機能する。インプリシット特徴は前者に、エキスプリシット特徴は後者に関連していることが示唆される。

インプリシット特徴としてのセルフ・エスティーム

1. エクスプリシット・セルフ・エスティームの問題とインプリシット・セルフ・エスティームの必要性

セルフ・エスティーム (self-esteem; 以下 SE) は、自尊心や自尊感情と訳され、人が心身健康で適応的に生活する場合の根幹となる心的特徴の1つとして研究界、教育界、そしてビジネス界で重要視されてきた。古くは William James (1890) が、実際の自己と理想自己の比較によって生まれる自己感情から SE を定義している。SE は、自己を価値あるもの、あるいは価値のないものとしてとらえる全般的な見方にあたる自己概念の評価的側面であるとも言える (Baumeister, 1998)。しかし、SE の概念の曖昧さ、そして測定方法の妥当性の問題から、多くの問題を提起してきた構成概念であることも事実である。

通常 SE は、自記式の質問紙を用いて、自分に関する質問項目に自分で評定して測定される。つまり、エクスプリシット SE が対象になる。ここでよく指摘される問題は、防衛性から虚偽的な回答が容易に生まれるということであろう。とりわけ SE は、自信がある、自分が大切など、自分自身の評価の根幹にかかわる特徴で、社会的にもその高低は人物評価としては最重要視される位置づけにある。このことから、防衛性や虚偽反応が出現しやすく (Farnham, Greenwald, & Banaji, 1999)、算出された得点と真の SE との関係の精度は低くなる可能性が高い。

次に、定義の問題がある。SE の定義は難しい。まず、性格なのか、感情 (関連特徴) なのかと問われると、どちらも、ということになる。特性の特徴が強ければ性格になるし、状態の特徴が強ければ感情にもなる。また、認知、思考、行動のすべての心的特徴に関連していることも言うまでもなく、この総合性を強調すれば性格になる (山崎・倉掛・内田・勝間, 2007)。これは、構成概念としての心的特徴のほとんどすべてにあてはまることで、SE に限ったことではない。これまでの SE の研究側面をみると、特性面が強調された特徴ではあるものの、性格ではなく感情面から規定される度合いの高い特徴と言えよう。

SE は、日本語に直訳すれば「自己尊重」になる。自分を大切に思うということである。ここから派生して、自信があるとか、自己の価値を認めているなどの内容が追従する。この評価内容から考えると、自分への他者からの評価に敏感になっている者にとっては切実な評価になる。この結果が他者に見られるということになれば、当然思ったままは回答しないことが予想され、回答は自信のある、価値のある方向に歪曲される。この他者の評価に鋭敏になっている姿は SE の本来の特徴ではなく、自分に自信がない故の態度であることは容易に想像される。他者の評価に敏感になる姿勢は、他者との比較により自己を評価することにつながる。この場合、他者より勝り一時的に自己評価が高くなるがあっても、他者比較への鋭敏性は他者より劣ることとその具体的結果に常時敏感になり、SE の不安定さ、そして、そこからの SE 低下をもたらす。このような自己評価状況にある場合は SE が低いものととらえる必要があり、また測定方法も同様にこの場合には得点が高くなるものであってはならない。

Kernis (2003) は、SE には多様な種類があり、それぞれの概念を明確にして弁別する必要性を指摘し、最終的には authenticity (真正性) につながる最適な (optimal) SE の概念をもつ SE が望ましいとしている。Kernis によると、真正性とは、日々の生活における本当の (中核となる) 自己の妨げられることのない働きと定義される (p. 13)。Kernis が指摘する最適な SE に限定した SE 研究の発展の速度は鈍いが、以前より、SE の多面性を指摘し、望ましい SE を抽出して測定することの重要性は指摘されていた。

表1には、成人ではもっともよく使用されている Rosenberg (1965) の尺度項目が示されている。日本でもこの尺度の使用頻度は高いが、統一した日本版の尺度はなく、複数の翻訳版が使用されている。内田・上埜(2010)は、信頼性と妥当性が低く、質問項目や選択肢が異なる尺度が日本で使用されている現状の問題を指摘し、Mimura & Griffiths (2007) を日本版の統一候補として信頼性と妥当性を検証し、標準化の高さを確認した。このことから、表1には Mimura らの日本版の項目が示されている。Rosenberg (1965) は、SE では、自分を「とてもよい (very good) と考える場合」と「これでよい (good enough)」と考える場合を区別する必要があることを指摘している。前者は、他者比較からくる優越性に基づき、後者は、自分が設定した価値基準に照らして自分を受容し、尊重することであり、彼は後者を真の SE と考えている。この観点から表1をみると、なるほど、後者の特徴が強い者は得点が高くなるが、前者の特徴が強く、他者比較で勝ることが多い者も得点が高くなることが予想され、両者の弁別がつかない。前者の場合は、他者比較に依存して自己評価を行うことから怒りや不安が高くなるのが当然予想され、Rosenberg の尺度とともに攻撃性や不安を測定して尺度得点の妥当性のスクリーニングとすることは可能であろうが、その場合でも実際の SE の高さを直接とらえることはできない。

表1 Rosenberg 自尊感情尺度の項目 (Mimura & Griffiths, 2007; 内田・上埜, 2010より)

-
- 1 私は、自分自身にだいたい満足している。
 - 2 時々、自分はまったくダメな人間だと思ふことがある。
 - 3 私にはけっこう長所があると感じている。
 - 4 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。
 - 5 私には誇れるものが大してないと感じる。
 - 6 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。
 - 7 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。
 - 8 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う。
 - 9 よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。
 - 10 私は、自分のことを前向きに考えている。
-

このように、Rosenberg の「これでよい」の方向で定義がなされたとしても、自記式の質問紙で自分について回答するエクスプリシット SE の測定では、防衛性などの要因からこの定義にそった SE の測定は難しいことがわかる。そこで代替の測定法になると、他者による評価が挙がる。測定対象者と接触度が高く、測定対象者のことをよく知っている者による評価である。たとえば、小学校で言えば担任教員が受け持ちのクラス成員について評価する場合である。しかし、この他者評価は難しい側面をもつ。まず、評価者が測定内容となる SE の概念を十分に把握する必要があるが、この点が難しい。たとえば、上記の「とてもよい」の特徴が強い者で、他者比較において勝者を除外することなどは、Rosenberg の尺度項目が他者評価に使われることを想定しても難しい。次に、SE はまさに自分による自己への評価であり、その評価内容が決まった行動に安定して明確に出るわけではないので、他者にとっては正確な評価が難しい。ノミネートのように、集団内で当該特徴が際立った者を指摘する場合はまだ誤りは少ないと思われるが、ノミネートであると集団内の全成員についての評価が得られない。この2つの難点は、仲間評定のように評定者が多い場合にも同様に指摘される難点となる。

ここから何らかの投影法を利用することが考えられるが、SE に特化した投影法はなく、利用が可能な投影法もあるが (TAT など)、その実施と評価には時間と労力がかかり、とくに評価においては客観性を保つのは難しい。そこで、インプリシット特徴として SE を測定することが考えられる。Greenwald & Banaji (1995) は、インプリシット SE を「自己に連合した対象ならびに自己に連合しない対象の評価に及ぼす自己の態度の内省的には確認されない (あるいは不正確に確認される) 効果と定義した (p. 11)。インプリシット特徴は意識上にあるのではなく、前意識 (意識可能領域) にあり、その前意識にある状態で測定することができれば、エクスプリシット SE がもつ上述の問題は解消されるものと考えられる。SE の誤った評価となる「とてもよい」という評価も、他者比較を意識した意識上の評価で浮かび上がってくる側面の特徴が強く、この評価の高い者のインプリシット SE は不安や怒りによって低下していることが予想される。

2. SE の測定方法

(1) エクスプリシット SE の測定法 ―現状と課題―

本論文ではこれまでに、SE をインプリシットとして測定する必要性を指摘した。エクスプリシット SE 質問紙は防衛性により歪曲されたり、虚偽の SE に高得点を付与することもあることにも言及した。つまり、現存の尺度は信頼性や妥当性の問題で玉石混淆の状態であり、また、測定する内容自体も異なっている。とりわけ、妥当性の検討が行われている尺度は少なく、信頼性や妥当性の良好さの問題よりも、信頼性と妥当性が検討され、その確認が行われていれば良い、と言えるほど不十分な状況である。

測定する内容では、上述の「とてもよい」の評価項目の有無 (遠藤, 1992) や因子数とその内容の問題が挙げられる。エクスプリシット尺度自体の問題を承知の上で使用する場合は、「これでよい」の特徴を測定する必要があることは上述したとおりで、この点では既に紹介した Rosenberg の尺度が不十分ながらも推奨され、実

際にこれまでの使用度は高い。

続いて、構成因子、つまり下位尺度の問題も大きい。SE の概念は容易に異なった概念が混合される可能性は上述したが、この概念を広く規定し全体的にとらえるほど1因子に傾く。逆に、SE が多面性をもつことを想定した概念定義であると多因子に傾く。概念を明確に規定し、その概念を測定する尺度になっていれば、そのようなものとしての扱いができるが、現実には、概念の曖昧さ、厳密に概念が規定されていたとしてもその概念を忠実に測定できる尺度になっていないことなどにより研究が混乱している。この点では、Rosenberg の尺度は概念規定が比較的明確で、基本的には1因子としての得点化が実施されている。しかし、Rosenberg の尺度にしても多因子であることを因子分析により指摘している研究もある (e.g., Kaplan & Pokorny, 1969; Richardson, Ratner, & Zumbo, 2009)。なお、1因子構造としてとらえる場合は、全般的 SE (general self-esteem) と呼ばれる。

確かに、全般的 SE が高いという側面が SE の基本であると考えられるが、領域によって SE が異なるということも想定される。このことは、自分が重視している領域 (学業、スポーツなど) と実際に好成果をもたらしている領域を考慮して考えられ、重視している領域で好成績をとっていれば、その領域での SE ばかりではなく全般的 SE も高まるだろう。重視していないが好成績をとっている領域について問われれば、その領域の SE が独立的に高くなることが想定される。

また、質問紙の項目が増えるほど多領域に関連することになり、多因子構造になることが多く、実際には、SE を1因子で測定する尺度よりも多因子での測定方法が多くなっている (e.g., Janis & Field, 1959; Pelham & Swann, 1989; Trafarodi & Swann, 2001)。ただ1因子の測定方法は根強く、Robins, Hendin, & Trzesniewski (2001) は全般的 SE を測定するため1項目 (私は高いセルフ・エスティームをもっている) からなる尺度を作成し、これが既存の広く使用されている SE 尺度と同等に多様な尺度と相関することを明らかにしている。また多因子でも階層的構造を想定する場合があります、Heatherton & Polivy (1991) は3つの主要要素 (パフォーマンス, 社会, 身体) の各 SE を想定し、その各主要要素下にさらに下位要素を置いている。

この、1因子がよいか、多因子がよいかは結果が混沌としていて、たとえば、Pelham (1995) は全般的 SE の重要性を、Marsh (1995) は各領域の SE は全般的 SE と相関しないと、結論に至るためには今後の研究が待たれる (Heatherton & Wyland, 2003)。

上で言及した尺度はすべて成人用であったが、子ども用の SE 尺度も数多い。Davis-Kean & Sandler (2001) は、SE や自己概念等の子ども用測定尺度を22尺度取り上げてメタ分析をしていることを見ても、その多さが分かる。そこでこの尺度はすべて子ども自身が自分について評定する自己評定質問紙であるが、他の質問紙と同様に、自己評定になると低年齢の子どもへの適用は個別の実施補助が必要になる。そこで、親や学校教師が評定する質問紙も多い (cf. Hughes, 1984)。また、SE 自体が極めて抽象度の高い概念であるので、子どもの場合この概念を具体的な項目に落とすことが必要になり、また具体的な項目に落とす場合に元の概念からのずれが生まれることも多い。1984 年の論文ではあるが、Hughes (1984) はすでにその時点で多数の子ども用 SE 尺度があることを報告している。そこでは、自己評定用として、9~12歳用7つ、6~9歳用4つ、3~6歳用5つ、4~12歳用の親や教師が評定する尺度5つが紹介され、多様な評定者のもと多くの質問紙が作成されていることがわかる。日本では、Pope, McHale, & Craighead (1988) の訳本 (高山巖監訳) が出たこともあり、Pope らの「こども用5領域自尊心尺度テスト」(Five-Scale Test of Self-Esteem for Children) の邦訳版がいくつか作成され (林, 2004; 中山・西山・柳澤, 2011)、また Rosenberg の尺度の小中学生版 (須崎・兄井, 2013) も作成されている。また、SE に特化した尺度ではないが、ドイツで開発された子ども用の健康に関連した QOL (Quality Of Life) の質問紙 (Ravens-Sieberer, Gortler, & Bullinger, 2000) を日本版小学生用 (柴田他, 2003) と中学生用 (松寄他, 2007) に適用した質問紙が作成されている。この中に、SE を測定する下位尺度があり、大量のデータを得て日本の子どもの SE の男女差や学年差 (古庄, 2007 参照)、さらには国際比較まで行っている (古庄, 2009 参照) 点では見逃せない尺度である。

(2) インプリシット SE の測定法 —現状と課題—

エキスプリシット SE の問題、そしてそこではとらえられない SE 特徴を測定しようとするところから発生した概念がインプリシット SE であり、その測定方法であった。インプリシット SE では、自己の自動的で、過剰学習された、非意識的な評価で、自己に関連した刺激に対する自発的な反応を導く (Greenwald & Banaji, 1995)。インプリシット SE の測定への考え方は、一般に我々は、自分に関連した刺激に、関連していない刺激よりも好

意的に評価し (Greenwald & Banaji, 1995), その評価傾向に必ずしも気づいていないことで, この点が正にインプリシット反応となる (Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000)。

エクスプリシット SE の測定と比較してインプリシット SE の測定方法の開発の歴史は浅いが, それでも, 論文化されたものに限定しても 10 を越える測定方法が開発されている (Zeigler-Hill & Jordan, 2010)。Zeigler-Hill らはそれらの測定方法を, 連合に基づくもの (association based) と間接的なもの (indirect) に分けて紹介しているが, ここでは, 主として実験室等で PC を用いて個別に実施するものと, 主として紙と鉛筆だけで集団で実施するものに大別して紹介したい。もっとも紙と鉛筆で実施するものは PC を用いて実施できることは言うまでもなく, 事実そこではどちらの実施方法も採用される場合が多い。

前者の代表格は, インプリシット連合テスト (Implicit Association Test: IAT) で (Greenwald & Farnham, 2000), 自己に関連した言葉と関連しない言葉の快語と不快語との自動的な連合を測定する。課題は, 指定された語の対や群 (たとえば, 自己関連語と快語や自己関連語と不快語) をその他の対や群と弁別して回答することになる。ここでは, 誤反応数と反応時間を測定する。基本的には, 自己関連語と快語の反応時間を自己関連語と不快語の反応時間と比較した得点が算出される。また, プライミング効果を利用した測定方法もよく使用されていて, 自己に関連した言葉と関連しない言葉を提示し, その後快ならびに不快語を提示してターゲット語に弁別の上反応する時間を測定する。最初に提示される語がプライム刺激になるが, そのプライム刺激が閾下で提示される場合 (Spalding & Hardin, 2000) と閾上で提示される場合 (Hetts, Sakuma, & Pelham, 1999) など様々な方法が用いられている。次に後者の代表格では, 名前-文字テスト (Name-Letter Test; Nuttin, 1985, 1987) が挙げられ, これは IAT とともに使用頻度が高く, 信頼性が高いテストになっている (Bosson et al., 2000)。このテストでは, アルファベットの各文字に対しての好みをリカート評定で回答し, SE が高い者は自分の名前のイニシャルへの好みが高いことを前提とした測定法になっている。この名前のイニシャルを自分の誕生日の月日の数字への好みに代替した測定法もある (e.g., Kitayama & Karasawa, 1997)。

これまでのところ, 個別実施か集団実施かということになると, 集団実施, すなわち紙と鉛筆だけで集団で実施可能な尺度は少なく, 上記の分類で言えば, とりわけ連合に基づく測定法では少ない。IAT もほとんどの場合, PC を前にした個別検査であるが, それを紙筆版で作成し, 集団実施が可能な方法の例は複数ある。たとえば, SE ではないが, Lane, Mitchell, & Banaji (2005) が内外グループへのインプリシットな選好を紙筆版として作成し, 日本でも岡部・木島・佐藤・山下・丹治 (2004) は超能力信奉傾向の測定で紙筆版の IAT を作成している。一方 SE では, さらに小塩・西野・速水 (2009) が紙筆版 IAT でインプリシット SE の測定法を作成している例がある。なお, 間接的な測定法である名前-文字テストなどは, 紙筆版で集団実施されることが多いことは既述の通りである。

このようにインプリシット SE の測定方法は多いが, インプリシット尺度間の相関はそれほど高くはなく (Bosson et al., 2000), このことは, インプリシット測定法によっては信頼性や妥当性の低い尺度があるか, インプリシット測定法によってインプリシット SE の違った側面を測定している可能性があり, 信頼性と妥当性の高い尺度の確認, とりわけ妥当性の側面は重要である。インプリシット SE の測定方法は全般的 SE の測定に終始しており, この点では, エクスプリシット SE は全般のみならず多側面から SE をとらえることが可能であった。このことから, 全般的 SE ではなく, 各測定方法がインプリシット SE の下位側面を測定し, その側面が異なるため相関が低いということも考えられる (Koole & Pelham, 2003)。

上記のインプリシット尺度はすべて成人用である。エクスプリシット SE では子ども用が作成済みであったが, インプリシット SE では子ども用はほとんどない。IAT の子ども版などは作成されている例があるが (e.g., Baron & Banaji, 2006), 集団で実施できる子ども用の尺度, つまり紙と鉛筆だけで実施できる尺度は著者たちの知る限りではない。子どもにインプリシット SE を測定する場合, 学校での児童生徒を対象にすることが考えられるが, その場合, 多人数の実施となると個別の検査はむずかしい。そこで, 集団で実施できる紙筆版のインプリシット SE の測定法が開発が待たれているのが現状である。

IAT は, インプリシット心的特徴の研究の新境地を拓いた測定法であるが, その後, Go/No-Go 連合課題 (Go/No-Go Association Task: GNAT; Nosek & Banaji, 2001) や FUMIE テスト (Filtering Unconscious Matching of Implicit Emotion Test; Mori, Uchida, & Imada, 2008) など IAT の変形版が作成され, 簡便化や集団実施化への方法が洗練されつつあり, 今後これらの方法はインプリシット SE の測定に適用されよう。

3. 両 SE の健康・適応への主効果と交互作用効果

エクスプリシット SE と健康や適応との関係についての研究は多く、両者は正の関係があることが報告されることが多いのに対して (e.g., 藤井, 2014; Ritter, Ertel, Beil, Streffens, & Stangier, 2013; Schimmack & Diener, 2003; van Tuijl, de Jong, Sportel, de Hullu, & Naua, 2014; Wegener et al., 2015), インプリシット SE では負の関係になることも多い (e.g., Wegener et al., 2015)。しかしながらこの場合、エクスプリシット SE も健康・適応も自記式の質問紙で自分自身について問われる測定法がとられることが多く、防衛性などの誤反応成分が共通に表れ、その結果正の関係が現れやすいことが推測される。この点インプリシット SE は、PC などを利用した個別検査か、紙筆検査であっても自分自身について問われているという意識はなく、異質の測定法であるだけに共通の誤反応成分が少なく、このことから正の関係になることが少ないのかもしれない。実際の病気や不適応問題 (暴力実行数や学校欠席日数など) など実態のある側面との比較ができれば両 SE と健康・適応との関係がこれらの問題を避けて明確になることが期待されるが、今のところこの手のデータは確認されない。

上記は両 SE と健康・適応との主効果の問題であるが、両 SE が健康と適応に及ぼす影響に交互作用があることも指摘されている。理想的には、両 SE とともに高いことが望まれ、そこでは SE の安定性も高くなり (Zeigler-Hill, 2006), 両 SE が低い場合は健康・適応への悪影響があることが当然のことながら予想される。そこで両者に違いが見られる場合が問題になるが、インプリシットとエクスプリシット SE の相関は、無相関か、せいぜい中程度の大きさであり (Farnham et al., 1999; Greenwald & Farnham, 2000), 両者は独立した成分を多くもつため両者に違いが出ることは頻繁に確認される。つまり、人によっては両 SE がどちらも高い者あるいは低い者、また SE の一方が他方よりも高く乖離がある者が存在し、この点での個人差が大きく、両 SE の一致度や乖離度をもつ意味、とりわけ健康や適応等に対して持つ意味が注目されている。

両者が不一致の場合に特に注目されるのは、エクスプリシット SE が高く、インプリシット SE が低い場合である。インプリシット SE が高いとエクスプリシット SE はある程度高くなるのが SE の概念の成り立ちから自然と予測できる。実際には確認されるものの、インプリシット SE が高く、エクスプリシット SE が低い場合は想定されにくい。高エクスプリシット SE, 低インプリシット SE の場合 (以下、典型 SE 不一致), 本来 SE は不安定で、自分が設定する行動基準の達成度に合わせて SE の高さが変化し、日々の変動性が高くなる (e.g., Kernis, Lakey, & Heppner, 2008; Zeigler-Hill, 2006)。この典型 SE 不一致は、ナルシスト (narcissist) に特徴的に確認されている (Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Brone, & Correll, 2003; Zeigler-Hill, 2006)。ただこの点は、インプリシット SE の尺度によっては異なった不一致度や影響力が出たり、インプリシット SE の多面性を想定すれば、その側面のとらえ方によって異なった結果が出ることも示唆されている (Bosson, Lakey, Campbell, Zeigler-Hill, Jordan, & Kernis, 2008)。また典型 SE 不一致では、変化しやすい SE のなか、自分にとって脅威となる情報を歪曲したり (Kernis et al., 2008), 子どもではより攻撃的になることも報告されている (Sandstrom & Jordan, 2008)。さらには、心身の健康面も悪化している (Schröder-Abé, Rudolph, Wiesner, & Schutz, 2007)。もっとも、Schröder-Abé らの同じ研究で、低エクスプリシット SE で高インプリシット SE の者も健康水準の低さが指摘されている。研究は少ないが、この低エクスプリシット SE で高インプリシット SE (逆 SE 不一致) の特徴も一部確認されており、楽観性が強く、自己防御の度合いが低いことが報告されている (Spencer, Jordan, Logel, & Zanna, 2005)。

この両 SE が不一致の者は自信という点では不安定なようで、自分に関連した情報が負である場合は、その情報を抑圧したり、避けようとする可能性が強く (Zeigler-Hill & Jodan, 2010), 問題は少なくない。

インプリシット特徴としての情動と感情

1. エクスプリシット感情の問題とインプリシット感情の必要性

本論文では、情動と感情を Damasio (1994, 2003) に従ってその用語の使用を規定し、さらに心理学上の概念としてアフェクトを追加規定した。また、情動、感情、アフェクトを総称して‘感情関連特徴’と呼ぶことにもふれた。

エクスプリシットな感情関連特徴の測定では、主に感情を測定している。そして、感情の測定からアフェクトを推測して測定する方法も多い。エクスプリット感情関連特徴の測定方法がもつ問題は、SE の測定法の場合と同様である。つまり、防衛性など感情関連特徴以外の要因により反応が歪曲されるということである。もっとも、ここでは SE のときほど防衛性は強く起こらないことが予想される。なぜなら、SE の高低は社会的な望ましさ

と強く関連しているが、負の感情の生起などは誰もが日常に経験しているからである。

感情関連特徴は、感情、アフェクト、情動という順で無意識性が強く、感情はほぼすべて意識上の反応であり、アフェクトと情動は大半が意識下の反応であるが意識上にも上ることは先述した。感情関連特徴は、無意識下の情動になるほど行動の決定力を持ち、その測定は今後必須の課題になることも既に述べた。アフェクトは活性とヴェイレンスの2次元上で変化し、その2次元平面上に感情が規定されることも紹介した。この点から、感情の測定結果からアフェクトを推測することも可能となり、エクスプリット感情測定は、エクスプリット・アフェクト測定に通じる。しかし、エクスプリットで測定している以上、感情関連特徴以外の反応からの妨害やアフェクトの無意識部分の測定の精度が落ちる。そこで、インプリットな測定法が必要になる。

2. 感情関連特徴の測定方法

(1) エクスプリット感情関連特徴の測定法 —現状と課題—

SE の場合同様、本論文は測定法を網羅して紹介する目的を持たないが、測定法の主要な内容はここでも紹介したい。SE と比較して感情関連特徴の測定法は多様で、自己による測定、他者による測定、そして、単発の測定、持続的、あるいは継続的測定など様々な方法がある (cf. Coan & Allen, 2007)。その中でもよく使用されている方法を紹介しよう。

エクスプリット測定法は自己による単発的な測定法が最も多く、ここでは質問紙が圧倒的によく使用されている。中でも、正負アフェクト調査票 (PANAS: Positive and Negative Affect Schedule; Watson, Clark, & Tellegen, 1988) の使用頻度は群を抜いている。この PANAS では、正負の感情 (アフェクト) が測定される。すなわち、ヴェイレンス次元に沿った測定法であり、加えて活性次元における活性感 (アフェクト) を測定している (Huelsenman & Furr, 2003; Huelsenman, Nemanick, & Munz, 1998)。PANAS は回顧的な測定法で、今現在～ここ1年、さらには通常など測定対象期間は柔軟に設定できる。この PANAS では子ども版 (PANAS-C: Positive and Negative Affect Schedule for Children; Lauernt et al., 1999) が開発されており、日本でも、PANAS の成人用 (佐藤・安田, 2001) と児童用 (Yamasaki, Katsuma, & Sasaki, 2006) が作成されている。

次に、自己による連続測定では、近年、経験抽出法 (ESM: Experience Sampling Method) がよく使用されている (e.g., Bassi, Ferrario, Ba, Delle Fave, & Vigano, 2012; Offer, 2013)。ESM は、たとえば、参加者が携帯型端末を持ち、一日の決まった時間に自動連絡信号を受け、そのときの感情の経験度をリカート法で回答して実験者に送信するという方法で、これを一定期間継続実施する。これは、刻々の感情状態を採取することができる長所があるが、回答項目が限定されることなど精度の点で問題がある。

(2) インプリット感情関連特徴の測定法 —現状と課題—

インプリットあるいは無意識上の感情関連特徴の測定方法は少なくないが、既存の投影法や半投影法は、実施に時間と労力 (専門性も) がかかり、その採点も時間を要し客観性に欠く。また、自律神経系の反応としての生理的反応を測定したり (cf. Mauss & Robinson, 2009)、表情を読み取るような測定方法 (e.g., Cohn, Ambadar, & Ekman, 2007) もあるが、同様の問題や特別な測定機器が必要になり、簡便かつ精度高く測定を行うには不向きである。

この現行の問題性を指摘し、近年開発されたのがインプリット正負アフェクトテスト (Implicit Positive and Negative Affect Test: IPANAT; Quirin, Kazén, & Kuhl, 2009) である。IPANAT は、人工語と称して5つのアルファベットからなる無意味な綴りを提示し、その人工語が与える音の印象から、提示された感情 (形容詞) をどの程度表現しているのかを評定する方法をとっている。この方法により、意識的に自分自身の情動や感情を直接参照することなく、また防衛性をほとんど受けることなく、インプリット感情 (アフェクト) が測定される。SE とは異なり、この種のインプリット感情 (アフェクト) の測定は、著書らの知る限りではこの IPANAT のみになる。

IPANAT は海外での成人用テストであるが、最近日本において成人用の IPANAT が同様の方法で作成され (下田・大久保・小林・佐藤・北村, 2014)、さらには児童用の日本版も作成されている (内田・福田・山崎, 2014)。内田ら (2014) 以前には児童用は世界でも例はなく、とりわけ日本の児童にはアルファベットの無意味綴りを使用する成人での方法は利用できなかった。そこで内田ら (2014) は、無意味綴りの代わりに無意味な線図を用いてインプリット・アフェクトを集団で測定する方法を開発した (Implicit Positive and Negative Affect Test for Children: IPANAT-C)。

3. インプリシット・アフェクトと健康・適応との関係

インプリシット・アフェクトの概念提起とその測定法の確立は比較的最近のことで、インプリシット・アフェクト測定法を用いて、健康や適応等上の問題との関係を調べた研究はまだ少ない。Quirin et al. (2009) は、インプリシットな正のアフェクトは日内のコルチゾール (cortisol) 分泌を、急性ストレスに対するコルチゾール反応はインプリシットな負のアフェクトが有意に予測し、コルチゾールの制御はエクスプリシット・アフェクトからは予測されなかったことを明らかにした。さらに、Quirin, Bode, & Kuhl (2011) は、脅威関連の映像を見た後のインプリシット正アフェクトの増加は、怒っている群衆の中で幸福な顔を認識する速度と正に関連し、インプリシット・アフェクトが外界情報の認知に影響を与えることを明らかにした。

Quirin らは IPANAT を用いての研究であったが、Gendolla (2012) は、顔写真を用いたプライム刺激を用いて、課題遂行中に提示された悲しみのプライム刺激は、幸せや怒りの同刺激よりも強い心臓循環器系反応をもたらすこと、悲しみプライムと比較して、怒りと幸せプライムは容易な課題では弱い同反応を、困難な課題では強い同反応をもたらすことなどを明らかにし、インプリシット感情 (アフェクト) が生理反応や課題遂行に影響を及ぼすことを示した。

さらに日本でも、児童用の IPANAT-C を用いて、自己信頼心 (自信) を育成する教育プログラムを実施し、その効果を検討した結果 (横嶋・村上・内田・山崎, 印刷中), インプリシット正アフェクトが教育により増大したことが示され、学校における教育プログラムの効果評価として新たな尺度を提供している。

今後の展望と課題

1. 測定方法の精度の向上

自分について紙上で回答する紙筆版の質問紙は、共通の方法をとることから、防衛性など共通の妨害要因が混入する。このため、たとえば、エクスプリシット SE の質問紙同士であれば、正相関が高くなることが多い事実も了解できる。この点インプリシット SE の測定法は異質とも言える方法が混在し、實際上、測定法間での相関は低い (e.g., Buhrmester, Blanton, & Swann, 2011)。この低い相関には、測定法の違いのみならず、インプリシット SE の異なった側面を各測定法が測定していることが関与している可能性 (Koole & Pelham, 2003) については先述した。

また、インプリシット SE では最も使用頻度が高く信頼されている IAT も、自分に関連する言葉 (I, my, me, myself など) と好ましい単語 (happy, rainbow, smile など)、好ましくない単語 (death, grief, pain など) の連合を調べようとするが、これらの単語との連合が SE を直接的に測定しているかどうかは不明である。つまり、SE が高ければ間接的に関連が高まることを想定した測定になっていて、直接性の欠如から精度が低まる。また、妥当性の確認がこれらの尺度では最重要課題となるが、この確認が極めて難しい。エクスプリシット特徴の尺度で行われるような、他の尺度との併存的妥当性の検討は、妥当性の基準となる尺度はほとんどないから実施できない。すると、何らかの実験による予測的な妥当性か、仲間や教師による評定法 (ノミネート含む) を使用する必要がある。実施可能性は仲間や教師の評定が高いが、この場合も、評定対象となる概念を明確に理解してもらった上での評定が前提になり、この理解がむずかしいことから注意が必要である。

いずれにしても、インプリシット特徴の測定は、エクスプリシット特徴の測定法が抱える問題の修正がほぼ不可能であることから開発されたという側面を一部もつが、その測定の精度を上げることは今後必須の要件になるう。

2. インプリシット心的特徴の研究推進

心理学に限らず、人の世は意識上の営みが、主要な行動決定要因となっていると考えられてきた。それもそのはずで、私たちは意識できるものだけに積極的に関与できるからである。しかし、本論文の初めに紹介したように、実際には私たちの日々の営みのほとんどは意識下の機能によって司られている。思考など高次の営みにおいてさえ、意識下の機能の影響力は大きかった。

この事実は、エクスプリシットな特徴の研究で人の心的営み (行動を含む) について調べても、営みの健全化の達成は難しいことを示している。S. Freud 以来、無意識の機能の重要性は誰もが分かっている。しかし、その機能への科学的なアプローチの困難さから、無意識の研究は心理学では研究の中心に据えられることはなかつ

た。

しかし現在、この無意識の機能に対して脳科学や心理学から新たな科学的アプローチが始まり、科学の舞台上でその機能を調べ、健全化へと操作できる可能性が増してきた。Freudの科学的根拠に乏しい知見でさえ、神経精神分析学という新学問により科学的に解明されたり、修正されたりする試みも始まったことも冒頭で述べた。いかに困難であろうと、その領域に踏み込まなければ、安易にエクスプリシット特徴の研究を重ねてもまったくの不十分である。

エクスプリシット特徴の質問紙による測定は、精度は低いが大量のデータからそれなりに見えてくる事実があると考え、推進されてきた。しかし今となれば、それは的外れな推進であり、そこで出てくる結果は、事実を歪曲し、研究自体の発展を遅らせている可能性もある。このことに注意を喚起すれば、無意識の領域に踏み込んだ科学性の高い研究を第一に推進する必要があることがわかる。

注

1) おもな翻訳本（普及書）は以下のとおり。他に専門書の邦訳も多数あり。

- ・ジャンカール・ヴェダントム 渡会圭子訳 隠れた脳－好み、道徳、市場、集団を操る無意識の科学－インターシフト, 2011
- ・レナード・ムロディナウ 水谷淳訳 しらずしらず－あなたの9割を支配する「無意識」を科学する－ダイヤモンド社, 2013
- ・マイケル・S・ガザニガ 藤井留美訳 <わたし>はどこにあるのか 紀伊國屋書店, 2014
- ・ダグラス・T・ケンリック, ヴラダス・グリスケヴィシウス 熊谷淳子訳 きみの脳はなぜ「愚かな選択」をしてしまうのか<意思決定の進化論> 講談社, 2015

2) おもな翻訳本は以下のとおり。

- ・クリストフ・コッホ 土谷尚嗣・金井良太訳 意識の探究－神経科学からのアプローチ－上下 岩波書店, 2006
- ・デイヴィッド・ローズ 苧阪直行監訳 意識の脳内表現－心理学と哲学からのアプローチ－培風館, 2008
- ・スーザン・ブラックモア 山形浩生・守岡 桜訳 「意識」を語る NTT出版, 2009
- ・スーザン・ブラックモア 信原幸弘・筒井晴香・西堤 優訳 意識 岩波書店, 2010
- ・アントニオ・R・ダマシオ 山形浩生訳 自己が心にやってくる－意識ある脳の構築－早川書房, 2013
- ・クリストフ・コッホ 土谷尚嗣・小畑史哉訳 意識をめぐる冒険 岩波書店, 2014
- ・J・グレイ 辻 平次郎訳 意識－難問ににじり寄る－北大路書房, 2014

引用文献

- Bargh, J. A., & Chartrand, T. L. (1999). The unbearable automaticity of being. *American Psychologist*, 54, 462–479.
- Baron, A. S., & Banaji, M. R. (2006). The development of implicit attitudes: Evidence of race evaluations from ages 6 and 10 and adulthood. *Psychological Science*, 17, 53–58.
- Bassi, M., Ferrario, N., Ba, G., Delle Fave, A., & Vigano, C. (2012). Quality of experience during psychosocial rehabilitation: A real-time investigation with experience sampling method. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 35, 447–453.
- Baumeister, R. F. (1998). The self. In D. Gilbert, S. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology* (pp. 680–740). New York: Random House.
- Blackmore, S. (2005 a). *Conversations on consciousness: Interviews with twenty minds*. Oxford, UK: Oxford University Press. 山形浩生・守岡 桜 (訳) (2009). 「意識」を語る NTT出版
- Blackmore, S. (2005 b) *Consciousness: A very short introduction*. Oxford, UK: Oxford University Press. 信原幸弘・筒井晴香・西堤 優 (訳) (2010). 意識 岩波書店
- Bosson, J. K., Brown, R. P., Zeigler-Hill, V., & Swann, Jr., W. B. (2003). Self-enhancement tendencies

- among people with high explicit self-esteem: The moderating role of implicit self-esteem. *Self and Identity*, 2, 169–187.
- Bosson, J. K., Lakey, C. E., Campbell, W. K., Zeigler-Hill, V., Jordan, C. H., & Kernis, M. H. (2008). Untangling the links between narcissism and self-esteem: A theoretical and empirical review. *Social and Personality Psychology Compass*, 2, 1415–1439.
- Bosson, J. K., Swann, W. B., Jr., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 631–643.
- Buhrmester, M. D., Blanton, H., & Swann, W. B., Jr. (2011). Implicit self-esteem: Nature, measurement, and a new way forward. *Journal of Personality and Social Psychology*, 100, 365–385.
- Coan, J. A., & Allen, J. J. B. (Eds.) (2007). *Handbook of emotion elicitation and assessment*. New York: Oxford University Press.
- Cohn, J. F., Ambadar, Z., & Ekman, P. (2007). Observer-based measurement of facial expression with the facial action coding system. In J. A. Coan & J. J. B. Allen (Eds.), *Handbook of emotion elicitation and assessment* (pp. 203–221). New York: Oxford University Press.
- Damasio, A. R. (1994). *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: Putnam. 田中三彦 (訳) (2010). デカルトの誤り－情動, 理性, 人間の脳－ちくま学芸文庫 (新訳文庫版)
- Damasio, A. R. (2003). *Looking for Spinoza: Joy, Sorrow and the Feeling Brain*. New York: Harcourt. 田中三彦 (訳) (2005). 感じる脳 ダイアモンド社
- Davis-Kean, P. E., & Sandler, H. M. (2001). A meta-analysis of measures of self-esteem for young children: A framework for future measures. *Child Development*, 72, 887–906.
- de Gelder, B., Tamietto, M., van Boxtel, G., Goebel, R., Sahraie, A., van den Stock, J., Stienen, B. M. C., Weiskrantz, L., & Pegna, A. (2008). Intact navigation skills after bilateral loss of striate cortex. *Current Biology*, 18, R 1128–1129.
- 遠藤由美 (1992). 個性化された評価基準からの自尊感情再考 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学－自己価値の探究－ (pp. 57–70) ナカニシヤ出版
- Farnham, S. D., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1999). Implicit self-esteem. In D. Abrams & M. Hogg (Eds.), *Social identity and social cognition* (pp. 230–248). Oxford, UK: Blackwell.
- 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, 85, 93–99.
- 古荘純一 (2007). 学童期の子どもの現況: QOL 尺度調査からの考察 小児の精神と神経, 47, 233–243.
- 古荘純一 (2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか－児童精神科医の現場報告－ 光文社新書
- Gendolla, G. H. E. (2012). Implicit affect primes effort: A theory and research on cardiovascular response. *International Journal of Psychophysiology*, 86, 123–135.
- Goodale, M., & Milner, D. (2004). *Sight Unseen: An Exploration of conscious and unconscious vision*. Oxford, UK: Oxford University Press. 鈴木光太郎・工藤信雄 (訳) (2008). もうひとつの視覚－＜見えない視覚＞はどのように発見されたか－ 新曜社
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4–27.
- Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the Implicit Association Test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 1022–1038.
- Haggard, P., & Eimer, M. (1999). On the relation between brain potentials and conscious awareness. *Experimental Brain Research*, 126, 128–133.
- 林みどり (2004). 子どもの自尊感情「子ども用5領域自尊心尺度」邦訳版の検討 石川看護雑誌, 1, 25–29.
- Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 895–910.
- Heatherton, T. F., & Wyland, C. L. (2003). Assessing self-esteem. In S. J. Lopez, & C. R. Snyder (Eds.), *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures* (pp. 219–233). Washing-

- ton, D. C.: American Psychological Association.
- Hetts, J. J., Sakuma, M., & Pelham, B. W. (1999). Two roads to positive regard: Implicit and explicit self-evaluation and culture. *Journal of Experimental Social Psychology*, 35, 512–559.
- Huelsman, T. J., & Furr, R. M. (2003). Measurement of dispositional affect: Construct validity and convergence with a circumplex model of affect. *Educational and Psychological Measurement*, 63, 655–673.
- Huelsman, T. J., Nemanick, R. C., Jr., & Munz, D. C. (1998). Scales to measure four dimensions of dispositional mood: Positive energy, tiredness, negative activation, and relaxation. *Educational and Psychological Measurement*, 58, 804–819.
- Hughes, H. M. (1984). Measures of self-concept and self-esteem for children ages 3–12 years: A review and recommendations. *Clinical Psychology Review*, 4, 657–692.
- James, W. (1890). *Principles of psychology*, Vol. 1. New York: Henry Holt.
- Jang, D., & Kim, D-Y. (2011). Increasing implicit life satisfaction. *Social Behavior and Personality*, 39, 229–240.
- Janis, I. L., & Field, P. B. (1959). Sex differences and factors related to persuasibility. In C. I. Hovland & I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility* (pp. 55–68). New Haven, CT: Yale University Press.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Brwone, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 969–978.
- Kaplan, H. B., & Pokorny, A. D. (1969). Self-derogation and psychosocial adjustment. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 149, 421–434.
- Keller, I., & Heckhausen, H. (1990). Readiness potentials preceding spontaneous acts: Voluntary vs. involuntary control. *Electroencephalography and Clinical Neurophysiology*, 76, 351–361.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1–26.
- Kernis, M. H., Lakey, C. E., & Heppner, W. L. (2008). Secure versus fragile high self-esteem as a predictor of verbal defensiveness: Converging findings across three different markers. *Journal of Personality*, 76, 477–512.
- Kitayama, S., & Karasawa, M. (1997). Implicit self-esteem in Japan: Name letters and birthday numbers. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 736–742.
- Koole, S. L., & Pelham, B. W. (2003). On the nature of implicit self-esteem: The case of the name letter effect. In S. J. Spencer, S. Fein, M. P. Zanna, & J. M. Olson (Eds.), *Motivated social perception: The Ontario symposium* (Vol. 9, pp. 93–116). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Lane, K. A., Mitchell, J. P., & Banaji, M. R. (2005). Me and my group: Cultural status can disrupt cognitive consistency. *Social Cognition*, 23, 353–386.
- Laurent, J., Cantazaro, S. J., Joiner, Jr., T. E., Rudolph, K. D., Potter, K. I., Lambert, S., Osborne, L., & Gathright, T. (1999). A measure of positive and negative affect for children: Scale development and preliminary validation. *Psychological Assessment*, 11, 326–338.
- Libet, B. (2004). *Mind time: The temporal factor in consciousness*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 下條信輔 (訳) (2005). マインド・タイム – 脳と意識の時間 – 岩波書店
- Libet, B., Gleason, C. A., Wright, E. W., & Pearl, D. K. (1983). Time of conscious intention to act in relation to onset of cerebral activity (readiness-potential): The unconscious initiation of a freely voluntary act. *Brain*, 106, 623–642.
- Libet, B., Wright, E. W. Jr., Feinstein, B., & Pearl, D. K. (1979). Subjective referral of the timing for a conscious sensory experience: A functional role for the somatosensory specific projection system in man. *Brain*, 102, 193–224.
- Marsh, H. (1995). A Jamesian model of self-investment and self-esteem: Comment on Pelham. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1141–1150.
- 松崎くみ子・根本芳子・柴田玲子・森田孝次・佐藤弘文・古荘純一・渡邊修一郎・奥山真紀子・久場川哲二・前川嘉平 (2007). 日本における「中学生版 QOL 尺度」の検討 日本小児科学会誌, 111, 1404–1410.
- Mauss, I. B., & Robinson, M. D. (2009). Measures of emotion: A review. *Cognition and Emotion*, 23,

209–237.

- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62, 589–594.
- Mori, K., Uchida, A., & Imada, R. (2008). A paper-format group performance test for measuring the implicit association of target concepts. *Behavior Research Methods*, 40, 546–555.
- 中山勘次郎・西山康春・柳澤 登 (2011). 児童用自尊感情尺度の検討 上越教育大学研究紀要, 30, 63–74.
- Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001). The Go/No-Go association task. *Social Cognition*, 19, 625–664.
- Nuttin, J. M. (1985). Narcissism beyond Gestalt awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, 15, 353–361.
- Nuttin, J. M. (1987). Affective consequences of mere ownership: The name letter effect in twelve European languages. *European Journal of Social Psychology*, 17, 381–402.
- Offer, S. (2013). Assessing the relationship between family mealtime communication and adolescent emotional well-being using the experience sampling method. *Journal of Adolescence*, 36, 577–585.
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 17, 250–260.
- 岡部康成・木嶋恒一・佐藤 徳・山下雅子・丹治 哲 (2004). 紙筆版潜在連合テストの妥当性の検討 – 大学生の超能力信奉傾向を題材として – 文教大学人間科学部人間科学研究, 26, 145–151.
- Pelham, B. W. (1995). Self-investment and self-esteem: Evidence for a Jamesian model of self-worth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1141–1150.
- Pelham, B. W., & Swann, W. B., Jr. (1989). From self-conceptions to self-worth: On the sources and structure of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 672–680.
- Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. W. (1988). *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. New York: Pergamon Press. 高山巖 (監訳) 佐藤正二・佐藤容子・前田健一 (訳) 自尊心の発達と認知行動療法 – 子どもの自信・自立・自主性をたかめる – 岩崎学術出版社
- Quirin, M., Bode, R. C., & Kuhl, J. (2011). Recovering from negative events by boosting implicit positive affect. *Cognition and Emotion*, 25, 559–570.
- Quirin, M., Kazén, M., & Kuhl, J. (2009). When nonsense sounds happy or helpless: The Implicit positive and Negative Affect Test (IPANAT). *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 300–316.
- Quirin, M., Kazén, M., Rohrmann, S., & Kuhl, J. (2009). Implicit but not explicit affectivity predicts circadian and reactive cortisol: Using the Implicit Positive and Negative Affect Test. *Journal of Personality*, 77, 401–425.
- Ravens-Sieberer, U., Gortler, E., & Bullinger, M. (2000). Subjective health and health behavior of children and adolescents: A survey of Hamburg students within the scope of school medical examination. *Gesundheitswesen*, 62, 148–155.
- Richardson, C. G., Ratner, P. A., & Zumbo, B. D. (2009). Further support for multidimensionality within the Rosenberg self-esteem scale. *Current Psychology*, 28, 98–114.
- Ritter, V., Ertel, C., Beil, K., Steffens, M. C., & Stangier, U. (2013). In the presence of social threat: Implicit and explicit self-esteem in social anxiety disorder. *Cognitive Therapy & Research*, 37, 1101–1109.
- Robins, R. W., Hendin, H. M., & Trzesniewski, K. H. (2001). Measuring global self-esteem: Construct validation of a single-item measure and the Rosenberg self-esteem scale. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 151–161.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self image*. Princeton: Princeton University Press.
- Sandstrom, M. J., & Jordan, R. (2008). Defensive self-esteem and aggression in childhood. *Journal of Research in Personality*, 42, 506–514.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, 9, 138–139.
- Schimmack, U., & Diener, E. D. (2003). Predictive validity of explicit and implicit self-esteem for subjective well being. *Journal of Research in Personality*, 37, 100–106.
- Schröder-Abé, M., Rudolph, A., Wiesner, A., & Schutz, A. (2007). Self-esteem discrepancies and defen-

- sive reactions to social feedback. *International Journal of Psychology*, 42, 174–183.
- 柴田玲子・根本芳子・松崎くみ子・田中大介・川口毅・神田晃・古莊純一・奥山真紀子・飯倉洋治 (2003). 日本における Kid-KINDL^R (小学生版 QOL 尺度) の検討 日本小児科学会誌, 107, 1514–1520.
- 下田俊介・大久保暢俊・小林麻衣・佐藤重隆・北村英哉 (2014). 日本語版 IPANAT 作成の試み 心理学研究, 885, 294–303.
- Spalding, L. R., & Hardin, C. D. (2000). Unconscious unease and self-handicapping: Behavioral consequences of individual differences in implicit and explicit self-esteem. *Psychological Science*, 10, 535–539.
- Spencer, S. J., Jordan, C. H., Logel, C. E. R., & Zanna, M. P. (2005). Nagging doubts and a glimmer of hope: The role of implicit self-esteem in self-image maintenance. In A. Tesser, J. V. Wood, & D. A. Stapel (Eds.), *On building, defending, and regulating the self: A psychological perspective* (pp. 153–170). New York: Psychology Press.
- Strack, F., & Deutsch, R. (2004). Reflective and impulsive determinants of social behavior. *Personality and Social Psychology Review*, 8, 220–247.
- 須崎康臣・兄井 彰 (2013). 小学生と中学生を対象にした Rosenberg における自尊感情尺度の妥当性, 信頼性及び因子構造の検討 日本生活体験学習会誌, 13, 93–98.
- Tafarodi, R. W., & Swann, W. B., Jr. (2001). Two-dimensional self-esteem: Theory and measurement. *Personality and Individual Differences*, 31, 653–673.
- 内田香奈子・福田衣利子・山崎勝之 (2014). 児童用インプリシット感情 (affect) 測定方法の開発 – 質問紙の原型の開発と信頼性・妥当性の最初の検討 – 鳴門教育大学研究紀要, 29, 160–168.
- 内田知宏・上埜高志 (2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性と妥当性の見当 – Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて – 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 257–266.
- Ungerleider, L. G. & Mishkin, M. (1982). Two cortical visual systems. In D. J. Ingle, M. A. Goodale, & R. J. W. Mansfield (Eds.) *Analysis of visual behavior* (pp. 549–586). Cambridge, MA: MIT Press.
- van Tuijl, L. A., de Jong, P. J., Sportel, B. E. de Hullu, E., & Nauta, M. H. (2014). Implicit and explicit self-esteem and their reciprocal relationship with symptoms of depression and social anxiety: A longitudinal study in adolescents. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 45, 113–121.
- Watson, D., Clark, L.A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of Positive and Negative Affect: The PANAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 1063–1070.
- Watson, D., Wiese, D., Vaidya, J., & Tellegen, A. (1999). The general activation systems of affect: Structural findings, evolutionary considerations, and psychobiological evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 820–838.
- Wegener, I., Geiser, F., Alfter, S., Mierke, J., Imbierowicz, K., Kleiman, A., Koch, A. S., & Conrad, R. (2015). Changes of explicitly and implicitly measured self-esteem in the treatment of major depression: Evidence for implicit self-esteem compensation. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 45, 113–121.
- Yamasaki, K., Katsuma, L., & Sakai, A. (2006). Development of a Japanese version of the Positive and Negative Affect Schedule for Children. *Psychological Reports*, 99, 535–546.
- 山崎勝之・倉掛正弘・内田香奈子・勝間理沙 (2007). うつ病予防教育 – 小学校から始めるメンタルヘルス・プログラム – 東山書房
- 山崎勝之・内田香奈子・村上祐介 (2014). 予防教育科学に基づく「子どもの健康と適応」のための学校予防教育における評価の在り方 – 無作為化比較試験への準備としての現段階の評価 – 鳴門教育大学教育大学研究紀要, 28, 39–45.
- 横嶋敬行・村上祐介・内田香奈子・山崎勝之 (印刷中). ユニバーサル学校予防教育「自己信頼心 (自信) の育成」プログラムの効果 – 小学校3年生を対象にし, 教育目標達成後の波及効果を考慮して – 教育実践学論集
- Zeigler-Hill, V. (2006). Discrepancies between implicit and explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-esteem instability? *Journal of Personality*, 74, 119–143.

Zeigler-Hill, V., & Jordan, C. H. (2010). Two faces of self-esteem: Implicit and explicit forms of self-esteem. In B. Gawronski & K. Payne (2010), *Handbook of implicit social cognition: Measurement, theory, and applications* (pp. 392–407). New York: Guilford Press.

Unconsciousness, consciousness, and implicit psychological characteristics

YAMASAKI Katsuyuki^{*}, UCHIDA Kanako^{*},
YOKOSHIMA Takayuki^{**} and UCHIYAMA Yumi^{***}

(Keywords : unconsciousness, preconsciousness, consciousness,
implicit psychological characteristics, self-esteem, affect)

In recent years, an increasing number of studies in the domains of brain science and psychology have been revealing that the roles and functions of unconsciousness are more powerful and extensive than expected. In line with this kind of research, it has also become a hot topic for what consciousness exists and works. This new trend of research strongly suggests the necessity of empirical research to scrutinize the roles of unconsciousness as well as those of consciousness. Thus, as a strategy for entering into the realm of unconsciousness, many recent studies have started to investigate implicit psychological characteristics that are considered to work preconsciously. To assess implicit characteristics, various types of measure have been developed using methods different from the ones for explicit psychological characteristics whose measures include many limitations such as receiving defensiveness. In this paper, after discussing about these recent streams of research around consciousness and unconsciousness, implicit self-esteem and affect were picked up as examples regarding implicit psychological characteristics, and explained in terms of their concepts and assessments while comparing with those of explicit self-esteem and affect. In these descriptions, the current paper emphasized both research for adults and children, showing the paucity of research for children. Finally, future directions are suggested, underscoring the necessity of developing reliable and valid measures, and promoting research of implicit psychological characteristics.

^{*}Department of Human Development, Naruto University of Education

^{**}Center for Education and Research on the Science of Prevention Education, Naruto University of Education

^{***}Center for Faculty-Wide General Education, Shikoku University